2013・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

33号
2013・12-2014・6

◉特集◉

越後国府・越後守護所・春日山城・
福島城・高田城へ至る道

「高田開府400年」の意味 その1

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

私の「直江津探し物語」

ロングインタビュー

Jホールディングス社長 伊藤利彦さん

Jホールディングスが目指す「マネージメント」各社の「ありたい姿」とは

歴史は「今日」への手紙

◉謎の青年

千代垣素直

■巻頭エッセイ・わたしの直江津

私の「直江津探し物語」

小松光代

今から二年ほど前、はじめて直江津のまち歩きをしたときのことです。ライオン像の家に集合し、案内人はSさんでした。

ライオン像の家、レンガ塀、林覚寺の小路（しょうじ）、まつみさの鏝絵、だいじごさん（大神宮）、街並みビューポイントなどの説明を聞きながら歩きました。

直江津生まれ直江津育ちの私にとって何十年も前から見慣れたはずの景色だったのですが、はじめて訪れたまちのようでした。二段坂の下町（したまち）にある実家の前を歩いた時は、なぜかドキドキしていたことを覚えています。子どもの頃から遊びの場であり生活の場であった界隈が、まちあるきの見どころとなり、ガイドマップを開くと写真やイラストで紹介されていることがとても新鮮で不思議なことに感じたのです。

今まで住んでいたまちに、こんな歴史があり、文化があり、人々がいたことに全く知らずにいた私は、強烈なパンチを見舞われたようでした。同時に、このまちの魅力を再発見することができたことに感謝し、ここに生まれ育ったことを誇りに思い、直江津がもっと好きになった瞬間でした。

その後、直江津の見どころやまちの魅力を紹介し伝える「直江津まちなかアテンダント」という仕事をさせていただくことになりました。結婚し直江津を離れて三〇余年、再びこの地で、しかも直江津にかかわる仕事に出会えたという喜びは格別のものでしたが、どこかで、この時の驚きや感動がきっかけになったのだと思っています。

アテンダントになって感じたことは、何カ月も前からワクワク心躍らせ、一年分のエネルギーをそそぎ込んだ祇園祭。嫁いでも祇園祭に来たくて、長男をおぶって家出までして来た絶対的存在の祇園祭なのに、あれほど無中になっていた祇園祭なのに、八坂神社や祇園祭の歴史については何も知らずにいたということ。三八朝市はいつどうして始まった市（いち）なのか考えたこともなく、市といえば母の買ってくるドラ焼きを食べる日だったこと。

まあ、情けない話だと思いました。同時に直江津をもっと知りたい、学びたいという気持ちが湧きあがってきました。そして私の「直江津探し物語」がスタートしました。

はじめは直江津の歴史、人物などの本を読むことからはじめたのですが、これが意外なことに、けっこう面白いのです。歴史と実際のまちの出来事がつながったり、別々に知っていた人物が同じ時代を生きていたことを見つけた時など、そのつど驚いたり感心したり、自分でもおかしいくらいに興奮するときがあります。また、心もとない私を見るに見かねた諸先輩方から本や資料をいただいたり、適切なアドバイスを受けたり、周囲の温かい気持ちが本当にありがたく、直江津の衆（しょ）のさりげない人情に感謝の日々です。

そして今、子どもたちをはじめ多くの方に聞いていただきたいとの思いで、直江津を舞台にした歴史や人物をお話しにして語り始めています。

今年の春から物語が二つできました。一つは「安寿と厨子王」。直江津は日本列島のちょうど真ん中で、東西文化・物が交わる地であるがために、親子が西と東の人買いに売られて離れ離れになってしまうという悲しい話です。もう一つは「直江津今町の義人・福永十三郎」です。直江津に魚の販売権を取り戻すために身命を賭した十三郎の話です。翁の恩をいつまでも忘れてはならないとの思いでお話にしました。これからも、直江津に関わる出来事、活躍した人々をお話しにして伝えていきたいと思っています。

私の「直江津探し物語」は、まだまだ始まったばかりです。はじめてのまちあるきに感じた驚きと感動をいつも心に持ち続けながら……。



こまつみつよさん
直江津出身。結婚して現在は安塚区在住。
安塚区で民話の語り部として活躍。
二年前から「直江津まちなかアテンダント」（㈱まちづくり上越）として、直江津学びの交流館を拠点に活動中。

■Jホールデングス社長　伊藤利彦さん

Jホールディングが目指す「マネージメント」各社の「ありたい姿」とは

「直江の津」が年間二回の発行で復活することになりました。

ちょうど、市内の七つの公共温泉施設を束ねるJホールディングスさんが発足され、巻頭のロングインタビューには大変タイムリーだと思い、お話をお聞かせいただくことにいたしました。

Jホールディングスは九月一日に旗揚げしまして、私共としてもいい頃だと思いますので、よろしくお願いします。

本題の前に、伊藤社長さんのプロフィールからおうかがいします。昭和二〇年、一九四五年のお生まれ。

本町一丁目の生まれです。高田高校、東大経済学部を卒業して三和銀行です。

その後の履歴を見せていただいたなかで「再建のプロ」ということが出てきますが。

プロというより、たまたま巡り合わせでそうなってしまったということでしょうね。

昭和五三年からマレーシアのPBSペルタニアンベアリング三和という会社へ行きました。

その後、三和オーストラリアや、最後は平成八年からJCBトラベルです。どこも大変な赤字でした。しかし、なんだか知らないけれど一生懸命やっているうちに黒字になっちゃったということです。

再建のプロというよりは、やっていたらよくなってきたというほうがいいでしょうね。特別な才能があるとかではなくて、ごく普通のことだと思います。

そういう現場をたくさんご覧になってきたことで、いろいろな分野への視野が広がるということもある。

昭和五八年にはオリックスのキャピタルへ出向しました。ベンチャーキャピタルなんですが、そこで八〇〇社、支店長二つで七〇〇社、全部で一五〇〇社くらい見てきました。

見ていると、うまくいっている会社とまずい会社とあるんですが、失敗した会社に学んだ部分が多いですね。「失敗に学ぶ」ということですね。

私の偏見に満ちた見方で申し上げますと、強い会社と弱い会社というのは、考えてみると裏腹になっていますね。強い会社にはたぶん三つくらいポイントがあると思っています。弱い会社の逆ですから、強い会社から言いますと、

第一は、会社の原点をしっかりと握っている会社ですね。マネジメントが、自分たちのどこに強みがあるのか、なにが原点なのかきちっと認識している会社が強い会社です。

最近話題にのぼるS社を例にとると、H電機といっていたときは―実は大学時代、株持っていたんです―、技術を生かしてやっていく会社にしよう、そんなにたくさん売ったりしなくていいと。自分たちの独自の技術を生かす会社にしたいって言っていました。ところが、二、三代前の社長さんの時代に、液晶で大儲けです。しかも技術もいい。当たり前のことですが、このビジネスモデルを全世界に推し進めればうまくいくんじゃないかと考えたわけです。

結果、他の部門がどんどん切られて、液晶部門だけがどんどん大きくなって偏っていった。液晶部門じゃなければ人ではない……。ところが円高ということもあって、採算が取れなくなる。もっと安い技術を持った韓国とか台湾が出て、結局負けた。

気がついて、もう一回原点に戻ろうとしているわけです。しかし、S社らしいアイデアが出せても、実際に作ろうと思うと膨大な部品メーカーさんが必要になります。この部品メーカーさんが液晶に特化した時にいなくなった。これはおいそれと戻れるようなものではありません。

自分たちの原点がしっかり分かっていれば、そんなことは多分なかったと思います。技術でやっていくのに技術を切ってはいけない、という考え方があったはずですが、それを忘れたというか変えてしまった。原点から離れちゃった瞬間……。

金融機関もそうですね。同じです。バブル時代を振り返ればわかります……。それは結果的に銀行を滅ぼすような感じになったわけです。銀行にもちゃんと社会的使命がある。その原点を忘れないことが第一条件だと思います。

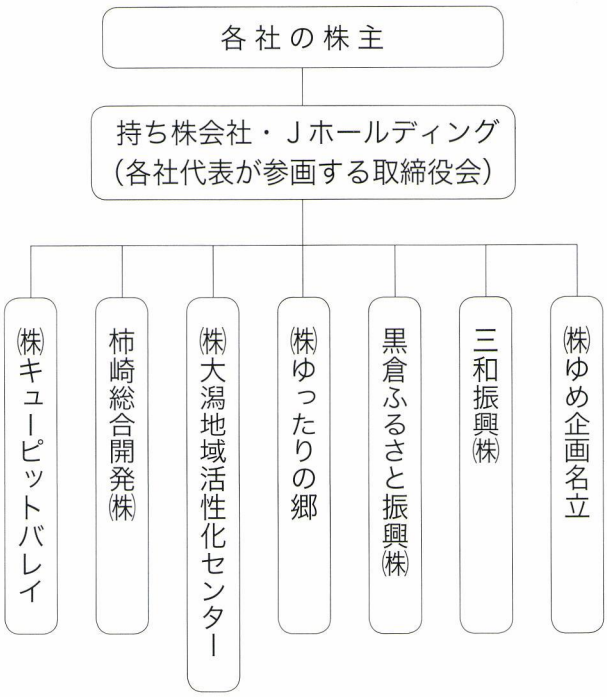
二つ目は、いい企業は人を大切にしている。失敗した



■プロフィール

昭和20（1945）年生まれ
上越市本町1丁目出身
南本町小・城南中学・県立高田高校卒業
東京大学経済学部経済学科卒業
昭和44年㈱三和銀行入行
昭和53年からPBS（マレーシア）取締役副社長・㈱オリックス・キャピタル出向・三和オーストラリア社取締副社長・㈱三和銀行吉祥寺支店長、秋葉原支店長店長・㈱JCBトラベル代表取締役副社長などを歴任
平成25年、公募によりJホールディングス社長に就任
前高田高等学校校友会東京支部副幹事長・Jネット会員

会社の原因を探ると、マーケティングが悪いとか、ああだこうだと、いろいろな理屈をつけますが、理由を徹底的に追い詰めると最後に、人が動いていないということにぶつかります。人が動いていないから会社がうまくいかない。原因の八、九割くらいを占めています。逆に人を大切にして、社員さんに気持ちよく働いていただいたら八割から九割の悪い原因がなくなってしまうわけですから、少しぐらい失敗しようが、マーケティングが多少悪かろうが、うまくいきます。



〈Jホールディングス〉
上越市の第3セクター会社を整理統合し、経営改革を目指して設立した持ち株会社。上越市が50％以上を出資する温泉施設などの観光関係7社で平成25年9月1日設立

人を大切にしないでリストラの嵐がたくさん吹き荒れました。今になってみんな困っていますよ。新しい仕事来ても人材がいない。がたがたになっています。

補足的に言いますと、何で人が機能しないのか動かないのかという問題があります。これは社員さんがマネージメントを信用してないからです。なぜかを追い詰めていくと、二つのぐらいの理由になります。一つは、マネージメントが曖昧であること、もうひとつは会社の中に不公平があることです。

マネージメントが曖昧だと感ずるのは、指示の出し方の問題があるからです。例えば「顧客指向」という言葉があります。ところが顧客指向と言っても四つぐらい考えられる。第一はお客さんの言うことに耳を傾けましょう。二つめはお客さんの言っていることを理解しましょう。三番目はお客さんを喜ばせましょう。四番目は高度な技術ですけど、お客さんのためにお客さんを支配しましょう。たとえば旅行社の例では、どんな旅行の企画でも、その添乗員が勧めるとお客さんがぞろぞろついて行くということがあります。これがいわゆるお客さんのためにお客さんを支配するということです。

顧客志向といっても、この四種類のどのレベルを指しているのか明確でないと、Aという社員は一のレベル、Bという社員は次のレベルと、バラバラに考えていたら仕事にならないです。

これはマネージメントが信用できないのではなく、マネージメントが曖昧だからです。「こういうことをしたいんだ」ということをはっきり伝える。そうすると、人は意外によく動くことになります。人が動くと、失敗してもうまくいっても、なぜそうなったかという原因がみんなよく見えてきます。

それは「何をしたいのか」「ありたい姿は」ということを明確にするということですか。

強い会社の一番は自分達の原点を知っている。二番目に人を大切にする。そして三番目が、自分達のありたい姿をきちんと認識する。原点に対してでも何でもいいんですよ。ありたい姿を認識する。こうなりたいんだということをはっきり認識することなんです。

ここに、Jホールディングス各社の社員さんが考えた「ありたい姿」がありますが、みんな同じ人間じゃないですからバラバラです。たとえばある会社が「地域の宝として自慢したい施設になる」と書いています。これはマネージメントの素直な思いです。「自慢したい」「ありたい姿」として、具体的にどうしたらいいのか、どうなりたいんだということをしっかりと認識している会社は強くなります。

私はこれからのJホールディングスの七社に対して、たえずこの問題を問いかけます。ありたい姿は「君子豹変す」じゃないけど、たえず変えてもらっていい。とにかくしっかりと持つこと。

儲かっていればいい、どれだけ売り上げがあったらいいなどは、その時の風まかせです。しかし、先ほどの「地域の宝として自慢できる施設を目指す」を考えると、今はできてない。なぜ出来ていないのか。なぜ自慢できないんですか。と、ずーっと考えていくと、自分が悪いんだという結論にもなってしまいますが、そこをきっちりと認識すること。難しいことは一つもない。

それが一番難しいのでは。

原因を追い詰めていくということは非常にきびしいと思います。ですが、ありたい姿を明確化し、何をしたいか、その方策として阻害要因を探る。あるいは問題点や課題を認識する。要するに「なぜ出来ていないかを認識する」こと。これはものすごく大事です。

会社がうまく行かない理由に、もう一つ、不公平と言いました。不公平というのは、だいたい社内でうまくいっている人たちから上がってきます。「俺がこんなに頑張って会社のためにやっているのになんであの人と給料が同じなんだ」と。どんな会社にも不公平があり、これは決してなくなりません。

マネージメントとしては、この不公平をいかに縮めるか。ちゃんとやっている人をきちんと見てやることです。ある意味で人を大切にしているんですね。

まとめて言うと、強い会社は原点をしっかり持っている。人を大切にするということと、ありたい姿をしっかりと認識すること。この三つが分かるということは、大人になるということなんでしょうかね。

あっという間に本題に入っていますが、Jホールディングスの社長に応募された理由と、高田高校校友会東京支部の機関誌「雪椿」の編集もされているので、ふるさとの事情がおわかりになっていると思いますが、それも含めてお聞きします。

二〇〇九年の六月から校友会東京支部の副幹事長になりました。普通は幹事になるまでに評議員を何年もやって、というところをいきなりなんです。先輩から言われて評議員になったら、こんどは副幹事長になれと。そういうことで、Jネット（「ふるさと上越ネットワーク」ふるさと応援組織）もやれということで、やっているうちに自分の考え方とか、行動の中には結局は故郷に養われた部分が結構あるなあと感じ始めていました。何か故

郷のために出来たらいいなあと漠然とは思っていましたが…。

去年の三月、ＣＮＮ（米国のニュース専門ＴＶ局）が高田の桜を「世界五大花見」の一つとして紹介しました。Ｊネットさんが記事に書けと言うんで、ＣＮＮに行っていろいろ話を聞き、上越市の観光課と連絡を取ったり、観光庁にも行きました。観光庁は知らなかったですね。

そうすると、より高田と近くなりました。先の「雪椿」に川上善兵衛さんのことを書いたことがありますが、取材に行き、話を聞いて、彼が著した『葡萄全書』（全三巻・昭和七・八年刊）という分厚い本を見せていただきました。まあこんな人がいたのかと思った。知らなかったことを非常に恥ずかしく思っていたんです。

ちょうどそのようなことを思っていたのですが、今年の一月、校友会の会合で副支部長の和久井さん、Ｊネットの会長でもありますが、その和久井さんが今回の募集に「あんたみたいな人がちょうどいい、応募しろ」というのです。その時、「ああいいですよ」と返事をしてしまった。当然アルコール入っていましたけどね。

返事をしたものの、もしかしたら本気かもしれないし、全然本気じゃないかもしれない。生活だって変わるわけですから。どっちかなという見極めをずっと考えていたら、机の目の前に川上善兵衛さんの写真がふわーっと出てきたんですよ。本当にびっくりしました。これは考えなければいかんなあと、二～三時間かけて応募書類を作ったんです。こういうのは一晩置くと大体やめてしまいますから、そのまま投函したんです。締め切りの一日前だった。そういういきさつですね。

善兵衛さんが導いた。

取材したときの自分の心の中へのインパクトが一番強かった。善兵衛さんの生き方とか、研究者としても熱心で、貧乏になっても最後までやる。しかも「マスカットベーリーＡ」が出来た時、全部発表してしまう。全国から教えてくれと言われれば、無報酬の手弁当で行っている。自分の資産は全部無くなっているのに。これはすごい生き方だと。岩の原葡萄園の丘に登らせてもらいました。善兵衛さんの励ましの声が聞こえるような場所なんです。

善兵衛さんは大変な偉人、尊敬できる人だと思います。そういう人になるのは、まあ無理でしょうけれど、気持ちだけは万分の一でいいから近づいていければ、自分の人生の意味があるのかなとそう思った次第です。

故郷に育まれたものを今度は故郷にお返しする。

返すというよりも、そんな生き方にちょっとあこがれているのかもしれません。前島密とか…。ああいう人たちへのあこがれというかあるのかもしれませんね。自分の気持ちの中で、最近ちょっと分かってきたような気がします

ですから、単身赴任ですけど別に何とも思わない。ちなみに、決まったのが三月二五日で、いきなり発表の記者会見が二八日。家内となんの相談も出来ないわけですよ。その中で質問がありました。赴任の本気度の話なんです。「当然、奥さんと一緒でしょうね」と。たぶん無理だろうと思っていますから、「先ほど市長さんにリーダーシップがあると言っていただきましたが、家庭でのリーダーシップはないんです」。みんな笑うんです。「いやあ、家庭ほど難しいものはないですね」と言うと、み

んな頷いているんです。

家庭にはマネージメントじゃない世界がありますから…。

信金倶楽部の会員の皆様は会社の経営者でいらっしゃいますが、持ち株会社の意味、それと合わせてJホールディングス社の持つ意味を合わせてお話いただけますか。

Jホールディングスには七社あります。よく見ると形態も違います。原点を大切にする。つまり皆さんの地元の思いを大切にすると言いますと、地元の思いも地元のいきさつも大変違います。みんな個性があります。

このバラバラなものに、どうやって経営の質を変え、高めていくという時、どういう道具を使うかということになるわけです。その時に一番易しいやり方としては、持ち株会社です。持ち株会社は、各会社の株を一〇〇パーセントずつ持ちます。各会社の株主さんは、市がたぶん七割くらいでしょうか、その他はいわゆる一般の株主さんです。その一〇〇パーセントの株を持ち、七社が集まってやれば効率的に出来ることがけっこうあります。

たとえばお客さんを集めるにしても一社ではチラシ一つ打てないことがあります。一気には集客機能の向上など期待できないですが、経営ノウハウの交流や導入などは持ち株会社を通じると楽にできます。ですから、持ち株会社というのは株を持つというより、機能を共有化する。あるいは共通化する。

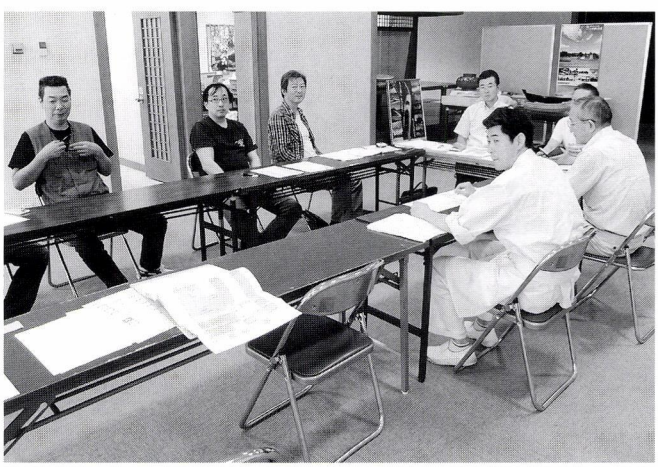
しかし個々には、それぞれ独自で各社のありたい姿を作っていく。持ち株会社の機能を活用しながら各社のありたい姿を勝手に求めてください、独自性を維持しながら各社が自立してくださいという話です。

七社なら、一社でやる時の無駄なことがなくなる。

そういうこともありますね。でも個性があるからいきなりは出来ないけれど、総務機能とか集中できることもある。

一番大きいのはノウハウの交流ですね。今日、設立パーティーのために七社の料理長会議をやっていますが、みなさん興奮してしゃべってます。第一回目は、料理が始まる時間になっても終わらなかった。それぞれ個性は強いけれど、ここでやると情報の共有が出来る。あるとこはしょっちゅう料理を変えている。あるところはあまり変えていない。変えるとお客さんが何べんも来てくれる。そういうことが分かるわけです。

料理人さんは厨房にいますから、お客さんの顔が得て



活発な提案が出されている料理長会議

して見えていない。それがある料理人さんは、お客さんにサービスする人たちをうまく使いながら、お客さんの情報を得ている。こういうことのノウハウの共有ですよ。こういうものが非常に大きいですね。

ゆったりの里とかハマナスさんに他のグループ会社二〇名くらいで、見学に行きました。単に行くだけじゃなくて社員同士の会話がある。そうすると、てんでんバラバラで分からなかったものが見えて来て相互交流が始まります。

現状をご覧になって、どのような感想をお持ちになりましたか。また、持ち株会社にせざるを得なかった根底には「三セク」という体質があるわけですが…。

一応うまくいってるところと、ちょっと手を入れれば直るなあというとこ、これは大変だなあというので分けますと、ちょっとした手入れで治るというところと、うまくいってるなあというところがほとんどです。

第三セクターというのは半官半民みたいなところがあります。そうすると半分公務員みたいになっている。私は完全に民で生きてきましたから、そんなサービス業は考えられない。この第三セクターの持つ体質みたいなものから脱却しなければならない。たとえばマーケッティングのやり方、つまり「どういうお客さんに来てもらいたいのか」が無い。

われわれシニア世代を狙うのであれば、その人たちはどういう生活をしてきたのか、何を考えてきたのか、どういう時代にぶつかってきたのか、そこまでの知識を持たなければいけない。でもそんな考えはほとんどないです。「これだけの物があるからやってくるだろう」で、ずっとやって来た。そんな時代は終わっています。

「ふるさと上越はお待ちしています」というチラシを関東に流しました。「お里帰りのお宿に」というネライです。関西からも来てますし、附属中の同窓生も大勢寄ってくれた。これは新しいお客さんです。今までは、狙いたいといいながらなんの手も打っていない。打つためにはどういう考え方したらいいのかが分っていなかった。

もうひとつはサービスの質の問題です。みなさん一生懸命やっていますが、そういう教育をかならずしも受けていない人が多い。たとえば、非常にうまくいっている所はお客さんに「声を掛けろ」じゃなくて「話しかけろ」と言っている。そういう指導をしています。うまくいかない所は、まったく声が掛りませんでした。お客さんへの声の掛け方、あるいは、クレームが上がった時、どういうふうに対応していけるのかということを教育していかなければなりません。

それとスピードですね。これは簡単じゃないので今はしょうがないですけど、要は三セク体質の改善です。もう一つは集客機能です。閑散期があります。うみてらす名立などは冬はほとんどお客が来ないと言う。ところが、グループ外ですが、非常にうまくいっている施設があります。そこのピークは八、一〇、一月なんです。一月にお客さんが大勢来る。食い物で売っているんです。作戦が非常にうまい。やり方次第で大きく変わって来る可能性は極めてあると思う。皆さんがその気になればいい。ああしろこうしろではなく、「自らのありたい姿」なんですよ。自分たちでやれるという自立です。それには徹底的に応援し、Jホールディングスの持つ機能を徹底的に使ってくださいということです。

まあ、行く方も三セクだから、サービスが多少悪くてもしょうがないだろう。安いしねと、許してしまっているところもあった。

それはありますね。やすらぎ荘の「ありたい姿」ですが、「行ってみたらよかったねえと、おらが温泉のやすらぎ荘と言わせたい。遠方のお客さんに、よかったなあ、こんなにいいとは思わなかった。名前の通り、やすらぎ荘だね。と言わせたい」。今、皆さん本気で考えていますよ。

今までの三セクのままだったら、そうのようなことは言わない。

発想はないですよね。

各市町村でやってたときは相当補填しているか、ごまかしもきいたんじゃないか。

たぶん、そうそう。

今、リタイアした夫婦、あるいは少人数の友達でという旅行がとても多くなっています。食べ物でも、本物のいい料理を食べて、ゆっくりして帰りたいという人たちと、旨いものはたくさん食べてきた。それよりも観光化されてない知らない所へふらっと訪れてみたいという人たちと両極に分かれている。大型バスを連ねてという時代に、ホテルを大きくしたところは大変なようですね。

できれば両方揃った方がいい。キーワードがありまして「もうちょっとかしこくなって帰りたい」まあ、われわれの世代ですね。それと他の人が行かないような所へ行ってきたという優越感みたいなものですね。

キューピットバレイは、東京から二時間半の「緑のユートピア」ですよ。あんまりばたばたしてない、緑が豊かだから一週間ぐらいいてもらうとか。こういうことが結構優越感の部分になるんです。「みんな知らないでしょう、二時間半でこんな所あるんだよ」と言えるわけです。そして、なにかひとつお利口になって帰っていただく。たとえば「発酵のまち上越」というのを売ろうとしている。麹は美人を作るとか、なぜ美人が作られるのかということを聞いて、ちょっとお利口になります。星の話でもなんでもいいです。

それから、キューピットバレイは女子会のムードなんですよ。五、六〇代の女性も多いですけど、四〇代の女性も結構いましてね。あぐらかいて車座になって一杯飲むというのがいいんです。ここにはロッジもあります。こういうところで一杯飲んでいただきたい。ポイントは「おしゃれ」っていうことです。おしゃれっていうのは食べ物の中に、たとえばイタリアンが入っているとか。ワインがおいしいとかね。それでいい湯がある。そういうことがおしゃれなんですね。それは付け加えることができるわけです。

ここの料理長は野菜ソムリエです。野菜が本当においしい。それプラス、イタリアンはできないかって聞いたら、実はイタリアンで修行していた。

わーっと来るんじゃなくて、来る人たちがお利口になるとか、おしゃれだとか、そういうポイントをしっかりと把握した上で、サービスを一つ付ければいいわけですね。ちょっとした小道具を使ってもいいですよね。

マリンホテルハマナスは、夕日がきれいですよね。そこに向って、よくありますよね、小さな鐘かなんかがあってキンコンとやる。そういうのとか。

と、こういう風に甘くなるよと実際に食べてもらう。

ここに来た人は、それを体験して優越感を感じる。ここへ来ない人は体験していないわけです。私たちの時代には、この優越感は大事な要素なんです。だからストリーとか優越感を作り出す。

ヤギさんシリーズ（浦川原区のファーストファームが製造するバターやソフトクリームのシリーズ）だとか、杢の里（浦川原区の木工房）さんだとか、そういう地元の方もでもよく知らないようなところもコースの中にいれて、いいものができれば…。

それこそタイアップできる話ですね。料理長さんたち知らないかもしれない。今日のような料理長会議で話題にすると競争心もいろいろあるから、これはちょっと違うよとかね。こういうのもあるよとかね。「生かんずり」はなかなか手に入りませんが、おいしいというのが分かってきている。こういう素材があるとすごくいい。

全部温泉宿泊施設。それが七社集まっている。同業であるということのメリットとデメリットは。

デメリットはない。客の奪い合いはそれほどないですね。たまたま距離が離れていますからね。こういうものどんどんふやしていこうと思っています。極端ですけれど、大分の湯布院は全部温泉宿ですよ。福島の喜多方はラーメン屋ばっかりです。それでも来るわけですね。みんなラーメン食べに来ているわけです。

上越はどの食べ物も美味いということ、海の温泉と山の温泉がある。そして思いやりというか人情があるということ。この三つぐらいで、上越は大いに売り出せると



おだやかな表情のなかに熱い想いが

釣具屋さんに聞きましたら、この周辺の海は魚種が多いうえ季節を問わず捕れる。そして非常にうまい。東京で一万円もする鯛がスーパーで二〇〇〇円程度で売られているところはないよと、言ってました。

実際そうなんですよ。融雪水が植物やなんでもかんでも押し流していきますから、植物プランクトンがすごく豊かになっています。

幻魚（げんぎょ）のコラーゲンはすごくおいしい。平目なんかの油もめちゃくちゃおいしい。私はえんがわが好きでよく食べますけどね。こっちのエンガワは本物ですよ。ぜんぜん違う。誰かに言わせると、東京などで食べているのはエンガワモドキだって。

キューピットバレイで、魚は山と雪の恵みで育てられているという、雪の豊穣さの話をする。あそこには雪室もあります。雪室コーヒーもあります。雪室で熟成する

思うんです。

帰った人が「あそこはよかったねー」と思い出があればいいわけです。あそこにいけば、どこでも温泉に入れるという選択肢が沢山ある方がいい、私はむしろ今少なすぎると思っています。もっと多くあった方がいい。

Jホールディングスの中で、ある一定のレベルを保つようになれば次はこっちに行ってみようかと、安心してそこに行ける。

そうですね。今、ブランドを打ちたてたいと思っています。

上越には有力な観光資源となり得るものは多いと思いますが、今の上越の観光の現状をどう見ていらっしゃいますか。

正直、売り方があまりうまくないですよね。派手に売るというよりは、もっと「観光とは何か」ということを突き詰めて考えて欲しいです。JCBトラベル時代に観光ってなんだろうと考えてみました。たとえば、一九世紀の半ばスエズ運河が出来上がるとヨーロッパの北の人たちが南の方に旅行します。第一次世界大戦が終わると、アメリカ人がヨーロッパへと行きます。自分達のルーツみたいなものを探しに。大津だったでしょうか、豆腐屋のおやじさんがツアーを組んで、みんなでお伊勢まいりにいったのが、日本の団体ツアーの第一号といわれています。

そこにある「物」を見に行くのも確かに旅行ではありますが、もうひとつはソフトの資源なんです。高田城を見た、桜を見た。だからといって年に何回も来る人いませんね。じゃあソフトはどうか、そこへ行っていい気持ちになる。あるいは自分の求めていたものがそこにあった。気持ちの中で求めていたものがあった。これはリピーターになります。

長くなりますが、最初に話した添乗員さんの話です。一人当たり一五〇万円から二〇〇万円くらいのファーストクラスの八、九人くらいのツアーで、夏のドイツで大雨にぶつかったんです。とても目的のホテルに行けない、添乗員が一生懸命連絡とって近くの宿屋へ向いました。もう七時過ぎ、老夫婦がサービスしているだけの小さい宿屋で全員分のベッドがない。食べ物も老夫婦用のりんごと、少しのパンとワイン。七月ですけど暖炉をたいて、輪になってみんなで分けあって食べているうち自然に会話が始まり、自分は姑のために一生懸命やってきて、姑が亡くなってようやくほっとした。それから、私も私もと本音みたいなものがでる。それだけで旅行が終わった。ホテルには泊まってないしクレームの嵐になるはずだったのですが、あの夜がいちばんよかった。あれはすばらしい。それをリードしてくれた添乗員さんは最高だと礼状が来たと言います。城を見なくても…。それからというもの、その添乗員さんから声がかかると、みんな行っちゃうんです。実はソフト面の観光こそ最高のものだったということです。

わが上越は、水も空気もきれいだし、人はやさしいし、しっとりしているし、酒も旨いのがある、食い物も旨い。観光としては最高じゃないですか。あけてびっくり玉手箱です。一度そういう空気に染まっちゃったら、何回でも来ます。

だけど、こちらはその魅力を分かっていません。はっきり言って。そういう、もてなしが出来るのに。

ほとんどの上越の人は、上越にはいろいろ見る場所があって歴史的なものもあるし、それを見せる仕掛けをしていないじゃないか、という批判が圧倒的に多いのですが、今のような話をする人はいない。

おもてなし文化ですね。まずはそれに気がつくべきです。それは、私が外から戻って来たから分かる。たとえば、瞽女さんの何がすごいかというと、瞽女さんを待ちかねたようにやさしく迎え入れる「瞽女宿」があって人もいた。あるいは雁木。目の前の私有地を自分たちで提供する。その素晴らしさを観光にする。訪れた人は、それに触れたいわけです。そういう旅行の魅力を持った所は、一回はまったら逃げられないです。

その土地の空気ですとか、日差しだとか風ですとか、具体的なものを見てきた時の印象よりも強いかもしれない。

私は強いですね。冬のフィンランドの街を歩いていた時、小さい子どもが来て、私に小さな手に握りしめていた飴みたいなものくれたんですけど、その時のイメージでずーっとフィンランドを見ていますよ。

上越はそういう観光を核として広がる可能性は大きいですね。

大きいというか可能性はあります。ハードはあるんだからソフト。

そしてスピード感でしょうね。上越の魚が美味しいということで、東京會舘の有名シェフが、とんで来たことがあります。スピード感については、上越に帰ってくるとほとんど感じないですね。

スピード感の無さを実感しますね。

北陸新幹線が来て、言わば違う文化が向こうから来る。その連中とどうやって折り合いをつけていくのか、それには絶対相手の手の内を知ってないとだめです。知っていれば、のんびりでもいいのですが、知らないでいて相手にしてやられたと思うのが一番嫌ですよね。

いろんな複雑な見方をする人たちがたくさんいるし、それがグローバリズムなのかもしれませんね。それを考えた時、上越の人たちはもう一回、自分たちのことを見直して、自分たちはたくさんいいものを持っているし、その中で守るべきこと、これはちょっと違うものにしようとか、見直すいいチャンスなんじゃないですかね。積極的にいろんなものを受け入れていった方がいいと思いますよね。

長時間、本当にありがとうございました。

インタビューを終えて

興味深い趣味の世界など二時間に及ぶインタビューは、残念ながら誌面の都合で全体の三分の一程度しか掲載できなかった。また、伊藤社長の意図するところをどこまで読者に伝えることが出来たか……。

インタビューの答えの中に一貫して流れる実践に裏付けされた「マネージメント」の考え方は、難解なドラッガーの翻訳や「もしドラ」ブームを起こした『もし高校野球の女子マネージャーがドラッガーの「マネージメント」を読んだら』（岩崎夏海著）などより、圧倒的に理解しやすい。ぜひ熟読を。

特集

越後国府・越後守護所・春日山城・福島城・高田城へ至る道

「高田開府400年」の意味 その1

小島幸雄（新潟県文化財調査保護指導員）

はじめに

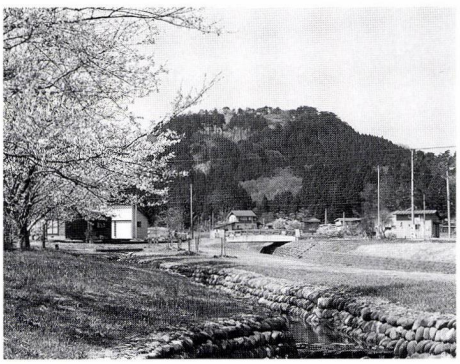
来る平成二六（二〇一四）年は、慶長十九（一六一四）年に徳川家康の六男松平忠輝が高田城を築いて四〇〇年という記念の年である。この記念すべき年を「高田開府四〇〇年」として様々な取組が行われている。

ところで、「高田開府四〇〇年」とはいうものの、高田城だけが城郭ではない。春日山城も福島城も市内に残る城跡である。

上越市には三か所の大城郭がある。春日山城跡・福島城跡・高田城跡である。春日山城と高田城は、市民の皆さんで知らない人はいないであろうが、福島城は「え、何処」と思う人がいるかもしれない。福島城は、現在の古城小学校のグラウンドが本丸で、その周辺から春日新田あたりに城下町を持つ城であった。

これらは、いずれも越後太守の城として築かれたもので、規模が大きいというばかりではなく、越後一国を治めるにふさわしい城として築かれたのである。

ここでは、「高田開府四〇〇年」を考える前に、なぜ三か所の巨大城郭が築かれたのかを、越後という国が一三〇〇年の歴史を刻んできたことから考えてみたい。



春日山城



福島城



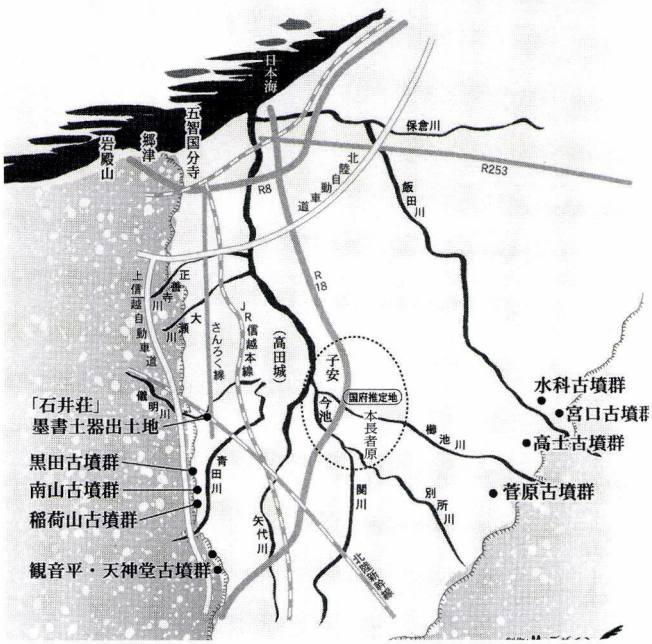
高田城

開府とは

「府」を『広辞苑』で引くと、宮廷の文書・財貨を収めた場所、役人が事務を執る場所、江戸時代では幕府のあった江戸、などと記されている。それでは、なぜ「高田開府」という言葉が生まれてきたのであろうか。

これは、一言で言うと「越後国府」を継承する国府の城として築かれた城であるという意味になる。いわゆる「府城」ということになるのだ。おそらく江戸時代には「府」などという語は使われてはいなかったであろうと思えるので、「高田開府」は「高田開府三〇〇年祭」に際しての造語といえるのである。しかし、この造語の意味は大きく、「高田開府」を考えるうえで、越後国府をひもとくことから始めよう。「高田開府」はひとまず後段に譲るとして、まず「越後国府」について考えてみよう。

高田平野に注ぎ込む河川と古墳の分布



吹上遺跡から釜蓋遺跡へ（史跡斐太遺跡群）

国府を考える前に、弥生時代から古墳時代にかけての頸城を見てみよう。

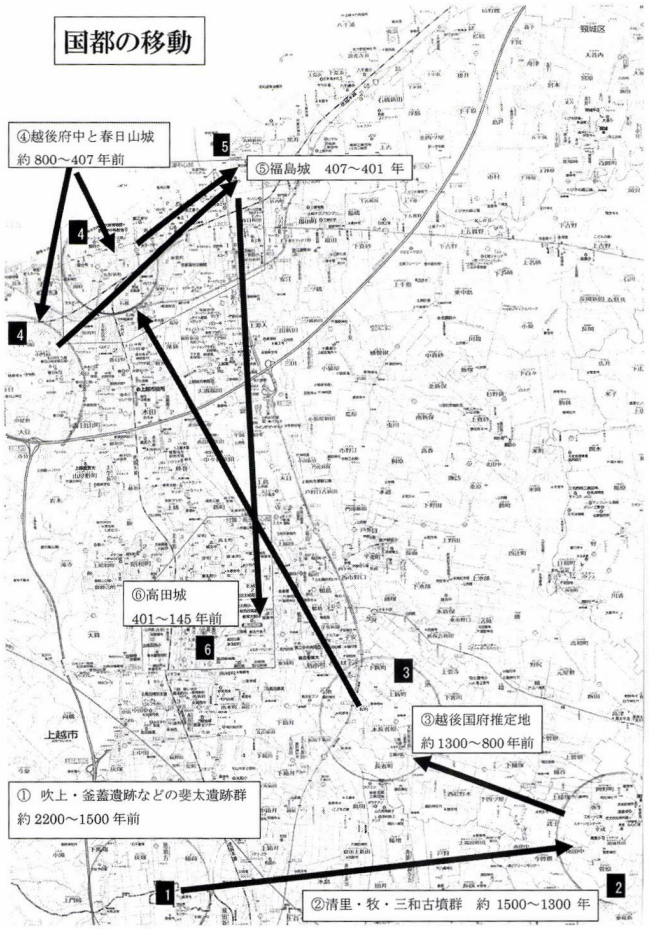
平成十二年五月、上越市の南端の稲荷集落の東で弥生時代の玉作り集落が確認された。吹上遺跡である。青田川の扇状地で湧水が豊富な吹上の地は、水田耕作に絶好である。水田耕作による豊富な食料確保が、ヒスイの勾玉と緑色凝灰岩の管玉を作っていた集落を支え、原料となる石材の無い土地で玉の製作を大々的に行えた最大の要因と考えた。しかし、玉作りは長く続いていない。その後は、弥生時代としては大型の墓を造るようになり、権力の誇示が見えてくるのだ。

吹上遺跡から出土した、弥生時代中期の土器を分析すると面白い傾向が見いだせる。玉を盛んに作っていた頃の土器を分析すると、信州系が三割で北陸系が七割であるのに対し、大きな墓をつくる時期にはその比率が逆転して、信州系七割で北陸系が三割となる。以前、土器の比率の意味を次のように考えたことがある。

玉を作る集団はヒスイの原産地の糸魚川から移住させられたもので、もともと北陸系の土器を作っていた集団であった。したがって、吹上集落の構成は北陸系の集団が多くを占めていた。ところで、三割も信州系の土器が出土する理由は何だろう。筆者は、作られた玉を信州に運ぶための集団だったのだろうと推測した。定着性が低いために、製作した、もしくは運び込まれた土器が少なかったのだろうと考えた。

では、逆転した理由は何だろう。なぜ大きな墓を造ったのだろう。

大きな墓を造るようになった時期には、玉作りが衰退



していることは前述した。それがヒントとなる。玉は糸魚川で作られ、吹上まで運ばれたのではないだろうか。そして、定住していた信州系の土器を持つ集団が、糸魚川から持ち込まれた完成した玉を消費地の信州方面に運んだのではないだろうか。もう少し踏み込めば、糸魚川を拠点とする玉作りの集団が、外来の信州系の集団によって製作地の移動を余儀なくされたが、原料の産地であり生産効率が良いと思える糸魚川に戻り、完成品の運搬という手段で流通させたと考えられるのである。したがって、大きな墓は信州系の集団によって造られたことが推察されるのである。極論すれば、信州系の集団の高田平野への進出と言ってもよいのではないかと考えている。

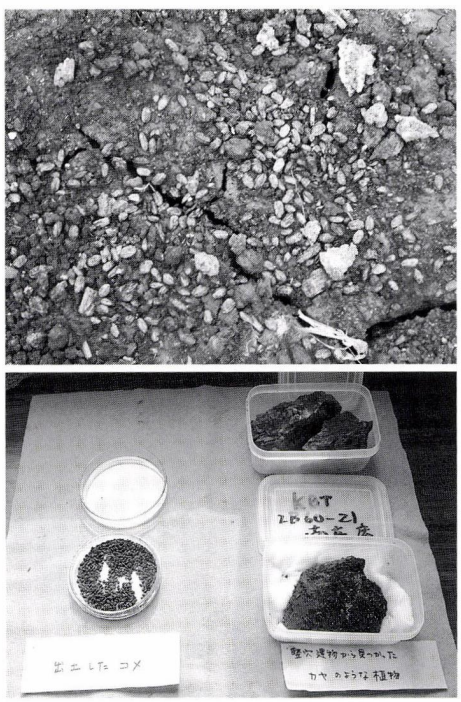
吹上遺跡発見から五年後の平成十七年、新幹線の上越妙高駅の西側で釜蓋遺跡が新たに見つかった。環濠と呼ばれる堀を廻らせた、弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めにかけての短期間に営まれたと考えられている遺跡で、当地方のクニの始まりの姿を示す遺跡と考えられている。

また、吹上遺跡と釜蓋遺跡を結ぶとされる斐太遺跡も、妙高市の北端の丘陵に営まれている。これらの遺跡は奴奈川姫のクニを語ることのできる遺跡であるかもしれない。更に資料が増え、奴奈川姫のクニの所在を語れる日を待ちたい。

古墳の分布

我が国の国家成立は、教科書的にいうといわゆる律令体制が整う奈良時代ということになる。しかし、弥生時代に稲作が伝わってから富の蓄積が始まり、それが小さな「クニ」と呼ばれるような地域をまとめる集団となり、畿内の巨大古墳に象徴的に表される中央集権的な「国」へと発展したとされている。

頸城地方にも多くの古墳が知られているが、それらは時代によって分布に偏りが見られる。古墳時代の初めご



焼けたコメが出土した釜蓋遺跡

ろは弥生時代の伝統を継承していたかのように、平野西部の青田川扇状地を中心とする斐太や黒田の周辺丘陵上に造られていた。この傾向は古墳時代の中頃までで、その後は平野東部の三和区から牧区を経て清里区菅原に至る丘陵上と扇状地に分布するようになる。この傾向にはいくつかの要因が考えられるが、一つには稲作の拠点である扇状地の安定が西部で早かったことも考えられる。また、青田川扇状地で形成された集団が大きくなり、扇状地の経営だけでは集団を賄えなくなったとも考えられる。これによってより生産力が高い、言い換えれば河川が多く扇状地が複数存在する平野東部に生活の根拠を移したとも考えられるのである。当然ではあるが、平野西部に人がいなくなったわけではなく、連綿と生活が続いていたことは言うまでもない。

このような古墳の分布傾向は古代に継承され、越後国府成立のカギを握ることとなるのである。広い平坦地と河川を有する土地を求めて、越後国府が平野中央部へ進出することは後述する。

古代越後国の国域確定

越後古代史は謎に包まれている。古代史を語るに不可欠の遺産は、国府・国分寺・国分尼寺の三点セットである。この全てが確証の無い国は、現在のところ越後一国なのだ。古代の国は全国に六八あったとされ、六七の国では三点セットのいずれか、もしくは全てが確認されているのだが、唯一越後国はどれ一つみつかっていなのだ。

昨年平成二四（二〇一二）年は、古代越後国の国域が確定して一三〇〇年の節目の年に当たり、さまざまな取り組みが行われた。ここでは、確定までの経過を整理して、古代越後国府の所在を探ってみよう。

越後という国が歴史上に現れるのは七世紀の終わり頃、奈良に都が造られる少し前である。この頃の越後は阿賀野川より北におかれた国で、新潟県の本土の大半は越中国に属していたことが知られている。その後、大宝二（七〇二）年に越中国から四郡が割かれて越後国に編入された。頸城・魚沼・古志・蒲原の各郡である。これによって現在の新潟県が全て越後国に編入されたのであるが、越後より北には国が無く国域は確定していなかった。更に一〇年後、和銅五（七一二）年出羽国が新たに設けられたことにより、鼠ヶ関より北が出羽国となり、越後国の国域が確定したのである。

古代国府の位置

古代の各国には、中央からの政策の執行と税の徴収を行う国府が置かれた。越後の国府を考えるために、北陸の各国の国府が置かれていたとされる場所を整理してみよう。

まず、同じ新潟県の佐渡を見てみよう。佐渡国府の確証はないが、国分寺の位置は明らかで発掘調査も行われて史跡公園として整備され公開されている。位置は、佐渡市の旧真野町にあり、国仲平野を望む高台に造られた。真野湾が国府津になる。さて、お隣越中国は、富山県高岡市伏木というところが国府とされ、能登半島の付け根の二上山の東側である。伏木は富山湾に面し、庄川と小矢部川が注ぎ込むため良港が存在していた。能登国は石川県七尾市に能登国分寺があり、ここも七尾湾に面した良港がその背景にある。加賀は平安時代になって新たに設けられた国であるが、国府は石川県小松市とされてい

る。越前国は福井県越前市（武生）が国府所在地とされ、日本海には面していないが、日野川を下れば九頭竜川を経て日本海に出ることができるし、一つ山を越えれば敦賀も近い。若狭国は福井県小浜市に若狭国分寺がある。良港をもち、鯖街道を南下し、近江今津に出れば琵琶湖を航行して都に物資を運べるのである。

越後国府の所在

このように見てくると、北陸の国府はいずれもその国で都に近い場所、そして良港を得られる場所におかれていたことがわかる。このような状況を越後国に置き換えて越後国府を考えてみよう。

越後国府が頸城郡に在ったことは、平安時代に編さんされた『延喜式』によって疑う余地はない。したがって、国府は高田平野のどこかにあったことになる。越後国府についてその所在を論じたのは、吉田東吾による『大日本地名辞書』である。吉田は、越後国府は「国府」の地名の所在から中頸城郡春日村を所在地として発表した。これが長く越後国府所在地とされ、国府研究を遅らせたともいえる。それに疑問を唱えたのは加藤晋平氏である。加藤氏は『新井市史』で高田平野の中央部に越後国分寺の所在を指摘して問題を提起した。

その指摘を実際の発掘調査で片鱗を見せたのが今池遺跡である。今池遺跡では多くの建物跡が発見され、昭和五五年当時越後国府ではないかと歴史・考古学会を喜ばせたことがあった。しかし、国府の一部ではあるかもしれないが、政庁の遺構がはっきりしないため国府そのものであるとの判断は見送られたのであった。

ところで、国府には国府津がある。越後の国府津は、地名の「郷津」がそれとされている。これも、直江津を越後国府とする考えに強力な助っ人となっていたことは否めない。

では、現在はどこが国府と考えられているかというと、上越市の三郷地区周辺が有力との意見が強い。しかし、国庁という中心建物が無く現在に至っても確証はない。

古代国府と城下町

北陸地方で、古代の国府から町並みが位置を変えながらも連綿と続いた町は上越だけである。越中は高岡市に国府があり、古城公園という城跡も残されてはいるが、これは加賀の前田氏が築いたものの、一国一城令によって放棄されたものである。高岡市は越中国には属するが江戸時代は加賀藩領であった。能登はどうだろう。謙信が歌を詠んだことでも知られる七尾城は、能登国分寺の東の山に築かれたものである。また、前田氏が金沢に入る前の一時期七尾に城を築いて在城したが、金沢に移って以降は城下町の機能は失われた。越前国は、武生に入ることができなかった浅倉氏が一乗谷に町を造り繁栄を極めたが、織田信長によって滅ぼされている。浅倉氏滅亡後は柴田勝家が越前を治めるものの、その統治の中心は北ノ庄、現在の福井市に移り国府は継承していない。

では、なぜ越後国府が高田平野を転々としながらも、国府機能を持ちながら明治維新まで続いたのであろうか。

親鸞聖人と五智

承元元（一二〇七）年、親鸞聖人が越後に配流になった。親鸞は、越後国府に流されたとされている。配流に





上　五智国分寺境内　竹之内草庵と伝えられる
下　墓所の後方が土塁

際しては特別な待遇が与えられ、越後国の国司に次ぐ次官級の役人に任じられたのが親鸞の叔父であった。

「竹之内草庵」について考えてみよう。これまで「竹之内草庵」を「竹に囲まれた庵」というような表現をしているもの目にする。誰も見たことはないのだから、草庵の形や文字から連想できる景観を思い描くのは自由である。しかし、ここで文字として伝わっているのではなく、韻として伝わっていたとしたらどうか考えてみよう。

考古学の世界で、それも中世の陶器や磁器の出土する遺跡を見ていくと、「竹之内」・「タテノウチ」などという名前を目にすることが多い。最近目にした中世遺跡の名前では、「鴨井竹ノ内」なるものがあった。

そこで、「タテ（館）」→「タケ（竹）」と変化したと考えてみよう。親鸞聖人は、越後国府に流されたことは前に記した。そして、叔父が次官として世話役の任を負って越後に赴任したとしたら、親鸞の住居も国府の主である国司とその次官が日常的に親鸞を世話できる場所が選ばれたと考えるのが妥当であろう。このように考えると、「タケ」と変化した「タテ」の意味を考えれば、親鸞の庵がどこに置かれたか推測できることになる。

筆者は、「タテ」を「館」＝「ヤカタ」、すなわち「国司の館」と考えるに至った。

国分寺の景観から見てみよう。国分寺には、寺にふさわしくないものが存在する。それは高さが三メートルもある土塁である。国分寺は、通常築地塀を回していて、土塁で囲むことはない。そもそも寺としては異様な景観を示しているのだ。市内には土塁で囲まれた遺跡は数少ないが、関根学園の北側に「新田畑遺跡」なる平安時代の遺跡があり、崩れてはいるものの土塁の痕跡が確認されている。土塁には堀もあり、十世紀頃の遺構と考えられているので、少なくとも十世紀には堀と土塁で囲まれた館がつくられたことになる。

親鸞の配流は十三世紀であり、新田畑遺跡の例からも土塁と堀で囲まれた館が存在したことは容易に推測でき、そのような館で国司の監視下に置かれたとすれば、「竹ノ内草庵」は「館の（中＝内）の草庵」と解釈されるのである。これは、五智国分寺の周囲にめぐらされた土塁を国司の居館であるという仮説にもとづくものである。

けっして、竹に囲まれた草庵ではないのだ。

親鸞の配流は、十三世紀初めには五智周辺に国府が移動していたことを示すものである。

至徳寺の発掘調査から

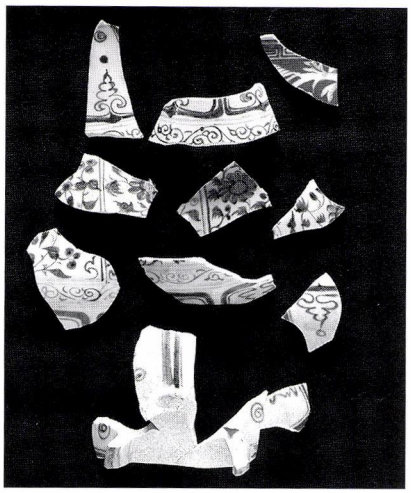
もう少し直江津に目を向けてみよう。

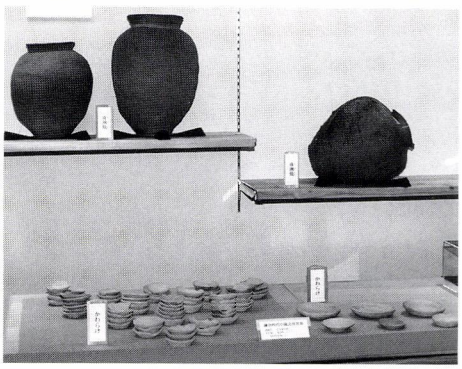
平成四年から六年にかけて、直江津駅の南側で発掘調査が行われた。伝至徳寺跡とされる遺跡である。

発掘調査が進む中、目を疑うようなビックリする出土品が発見された。中国元代の染付が出土したのだ。一〇

円玉くらいの大きさの破片を目にした筆者は、博物館で見たことはあるものの現物を手にしたことなどなく、感動に近くにいた遺物整理の女性の手を取って喜びを分かち合ったことを今も忘れない。

その破片は、玉壺春（ぎょっこしゅん）という名の壺の一部で、新潟県で初めて出土したものであるばかりか、日本海側では福井市の一乗谷浅倉氏遺跡以北で初めて出土したのであった。近年、秋田県の男鹿半島で出土したとの情報があるが、現物を見ていないので詳細はわからない。珍品は威信財と称されて、所持することに大きな意味を持つものとされている。珍品はこればかりではなかった。十二世紀から十三世紀、平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけての中国製磁器が大量に出土したのである。親鸞聖人が配流なった頃のことである。伝至徳寺を掘っていた同じ頃、金色堂で著名な岩手県の平泉でも発掘調査が行われていて出土品を見てもらったが、平泉との違いは単に威信財の珍品ではなく日用品が多いという差が指摘された。平泉より日常品の中国製磁器の割合が多いというのである。次に、中国製磁器をカワラケという素焼きの皿と共に考えてみよう。


中国渡来の磁器　伝至徳寺跡出土


重ねられて捨てられたかわらけ　伝至徳寺跡出土

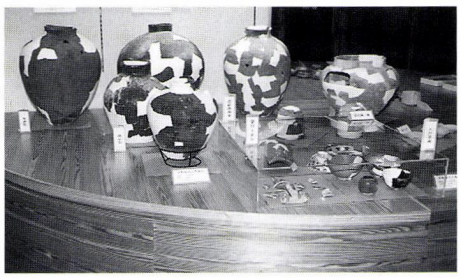
カワラケは、縄文土器以来の日本の伝統的な素焼きの技法で焼かれた、いわゆる土器である。燈明皿としても使われているこの単なる土器が、実は中国製の磁器と共に越後国府の繁栄をものがたる能弁な証人だったのである。カワラケの出土した量を単純に比較すると、新潟県内で最も多く出土した遺跡が伝至徳寺跡である。

このカワラケの主要な用途は何であろうか。実は、宴会に先立って行うセレモニーで使用する食器なのだ。それも使用が一回に限られ、再使用することはない。事実、伝至徳寺で出土したカワラケにはほとんど使用痕が無かった。現代に置き換えれば、神社で祭礼に使っている皿がそれに該当し、お神酒を一杯注ぐだけで機能が停止されて再使用することはない。七五三参りや神前結婚でカワラケを持ち帰るのは、記念品と言うよりも再使用しない証しとして渡されると考えた方が良い。

中国製磁器はカワラケとは違う。再使用する。これは威信財であり、所有するということ自体が権威を示すことに使われ、富を象徴するものと考えられている。客人に所有を誇示するものと考えていいだろう。

このように見てくると、中国製の磁器を多く所有し、カワラケも多く使用していた伝至徳寺とはいかなる機能を有していたのだろうか。

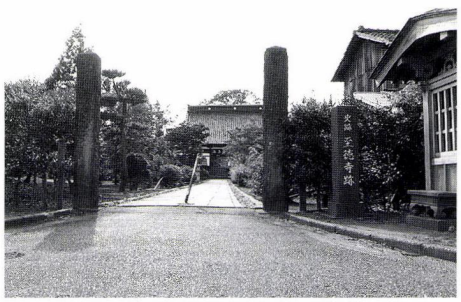
私は、この場所を直江津に国府が移動してきてから使用された、越後の迎賓館があった場所ではなかったろうかと考えている。直江の津という名があったかどうかは別として、国府の物資の集積地であり富を誇示するために客人をもてなす迎賓館の機能を持っていたのではないかと推測しているのだ。



上杉氏の繁栄を伝える　伝至徳寺跡出土



徳泉寺にある至徳寺跡出土と伝えられる石塔



至徳寺の面影を伝える徳泉寺

守護所の所在

伝至徳寺は、鎌倉時代ばかりではなく、一時空白期があるが室町時代にも盛んに使用されていた。十五世紀につくられたと考えられている一辺が二六〇メートルもある堀を廻らせた方形の居館は県内随一で、現在は越後の守護所、越後上杉氏の居館と考えられている。前述の中国元代の壺が使用されていたのは、守護所と考えられている時代である。

では、なぜ守護所がここに築かれたのであろうか。それは、越後府中の権力と富の象徴である湊の機能を掌握するためであったろうと考えている。平安時代から鎌倉時代に富の集積地として迎賓館のような機能を有していた場所に権力の象徴たる館を築いたと推測されるのである。そして、湊の機能そのものが館に付随していたらしいのである。

守護所と考えられている館の南東の隅は古川と呼ばれている、旧御館川の河道に接していることがわかっている。御館川は、当時は正善寺川そのもので今見られるような小河川ではなく、相当の水量を有する川であったと推測されている。したがって、艀が入るには十分な水量が確保されていたと考えられ、郷津で艀に移された物資がここで陸揚げされたと考えても良いだろう。逆に、ここから船に積まれたものは郷津で外洋を航行する大型船に積み替えられたのであろう。

守護所は、越後上杉氏の政治の拠点であるばかりか、越後府中の経済の中心的機能をもあわせもっていたと言っても良いだろう。

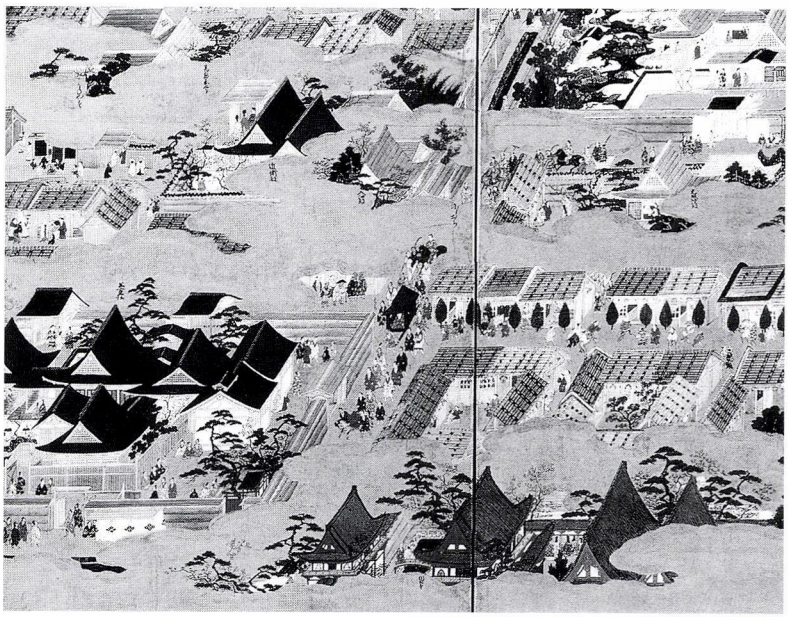
上杉謙信の関東管領就任

天文十七（一五四八）年、越後守護上杉定実の仲裁で謙信は兄晴景の養子となって長尾家を相続した。二年後、天文十九（一五五〇）年、守護定実が死去したが、定実には子が無く世継ぎが不在となったため、越後上杉氏は断絶した。その直後、室町幕府十三代将軍足利義輝は白傘袋と毛氈鞍覆の使用を許し、謙信が国主待遇の家格を得たのである。しかし、謙信は上杉氏を相続していない

ため、長尾氏のまま、守護代の家格のまま国主待遇を受けたことになる。

天文二二（一五五三）年、関東管領上杉憲政（群馬県藤岡市の平井城主）は、北条氏康（神奈川県小田原市小田原城主）に攻められて敗走し、謙信を頼って越後に逃れてきた。謙信は、御館を造営して憲政の居館としたとされているがその確証はなく、筆者は謙信自らの権威の象徴として御館を造り、政庁としたと考えている。詳細は後で詳しく述べる。

翌天文二二（一五五三）年に謙信は、初めて上洛して後奈良天皇に拝謁し、永禄二（一五五九）年再度上洛して正親町天皇に拝謁した。



最近では、大きな建物の室町将軍家に向かっている輿の人物は上杉謙信であろうと考えられている「上杉本洛中洛外図屏風」（御館公園案内看板より）

永禄四（一五六一）年、謙信は関東管領上杉氏を相続し、上杉憲政の一字を賜り政虎と称した。同年には将軍義輝の一字を賜って輝虎と名を改めている。

関東管領の就任式は、鎌倉の鶴岡八幡宮で執行されている。

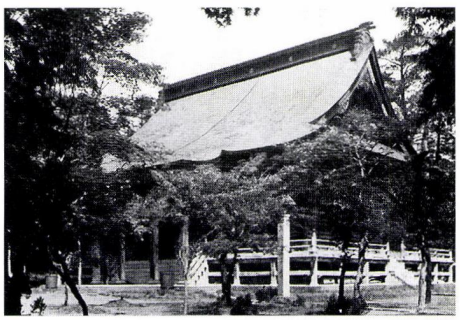
謙信による越後国分寺の再興と御館

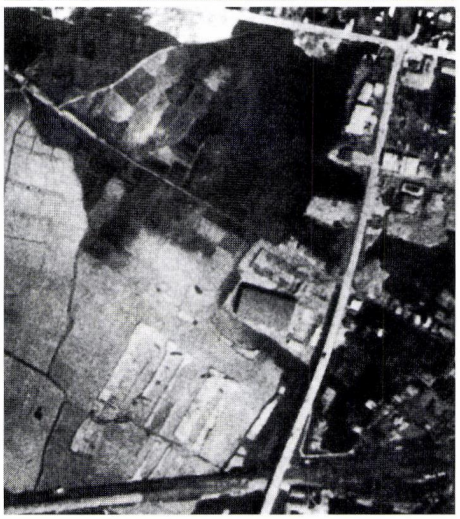
永禄五（一五六二）年、謙信は越後国分寺を再興することになる。謙信の越後国分寺再興は新造ではなく、現在の国分寺の位置にあった円通寺を越後国分寺としたと伝えられている。

謙信の越後国分寺再興は、関東管領就任と無関係ではない。というよりも、関東管領就任によって再興がなされたと考えるのが妥当である。前年の関東管領の就任式が鶴岡八幡宮で執行されたのも、越後国分寺再興も謙信の権威を内外に示すために行われたセレモニーであったのだろう。

国分寺は言うまでもなく、奈良時代の天平十三（七四一）年、聖武天皇の勅願で全国に一国一寺が建立されたものである。僧寺と尼寺があり、僧寺は「金光明四天王護国寺」という。天皇の命により建立されたものであることで、その造営の命は各国の国司に下されたことは明らかであり、謙信は国主級の地位と関東管領という職責を得て国分寺の再興ができたのであろう。

ここで謙信による越後国分寺再興を述べたのは、国分寺の所在は国府に在るものであり、謙信は越後国府所在の大名として再興を企画したことが明らかであるとの思いからである。以前、川村知行氏（上越教育大学大学院教授）が指摘したように、関東管領就任から一年という





上　昭和初期の五智国分寺
下　御館跡の航空写真　中央下が御館跡

短期間で国分寺の再興を成しえたのには、部分的な修理、経済的な保護であったとする考えが妥当である。円通寺という寺があったとするのもうなずける。

御館の造営について考えてみよう

御館は、関東管領上杉憲政が越後に来た際、謙信が造営して住まわせたとされてきた。ところで、御館と国分寺の位置、そして国分寺の古い絵図から推察すると、二者は同じ都市計画によってつくられたことがわかるのである。

もう一度国分寺を考えてみよう。国分寺は現在南面して堂宇が造られている。これは、古代の国分寺がいずれもそうであるように正式な国分寺の造り方であり、何ら問題はない。国分寺が描かれた居多神社所蔵の「四至絵図」には微妙な表現であるが、南面する本堂の描写がある。本堂の妻の部分が東を向いており、南面すると考えるのが妥当である。しかし、絵図には東から道が国分寺に向かって伸び、現在の加賀街道は描かれていないことから、東から入る寺であったことが容易に推測できる。また、国分寺の東は「大門」という地名が残り、かつては東に門があったことを示している。今でも本堂の右手には石段があり、登り切った両脇に礎石が据えられていて門があったことをものがたっている。また、国分寺の西から北には堂浦という地名が残り、東面していたこともあったと言えるのである。国分寺の東面についてはかつて花ケ前盛明氏の論考が参考になる。

では、南向きなったのはいつのことであったろうか。それは加賀街道の整備と同時期と考えられる。高田に城が築かれ、街道も高田を経由するように整備された際に行き交う人々が遥拝できるように街道に向かうように参道が付け替えられたのであろう。

絵図の道について考えてみたい。先に述べたように、国分寺の東から一本の道が東に向かって伸びている。大ノ手の道と言われ、現在でも東雲町や五智三丁目にその片鱗を確認することができる。この道は、かつての御館と同じ方位によって造られたことがわかっており、御館以前にあった守護所とは合致しない。というよりも守護所を斜めに横切るように造られた可能性も指摘されているのである。

このように考えてみると、御館は謙信の越後国分寺再興と同じ時期に造営された可能性さえ指摘できることになる。関東管領となった謙信が自らの政庁として御館を造営し、そこから常に遥拝できるものとして国府に不可欠の国分寺を造営したとしたらいかがであろうか。二度の上洛を果たし、二代の天皇に拝謁を許された謙信なるが故の町づくりが見えてくるような気がするのである。

御館の南にも川が流れており、守護所と同じような機能、府中を経由する物資の荷揚げ場として権利を掌握し

ていた可能性が高い。

春日山城の姿

新潟県中頸城郡春日村大字中屋敷字春日山一三五七番地、これは春日山城の本丸が所在する土地の表示であり、この一筆で約二一ヘクタールの広大な面積を有し、本丸だけではなく主要な屋敷はほぼ含まれている。

春日山城は、越後府中の城である。守護上杉氏が守護代長尾氏に守らせたとされている。その規模は広大であり、何といっても屋敷が山頂の実城（本丸）から大豆集落の西側まで連綿と絶えることなく続いている様は、山城の中でも特異な景観をつくり出している。こんな山城は全国唯一なのだ。

なぜ、このような特異な山城になったのだろうか。

慶長二（一五九七）年制作とされる絵図が米沢市に残されている。「越後国郡絵図　頸城郡」がそれである。この絵図は頸城郡の内、関川以東を描いているもので、残念ながら春日山城の位置する関川以西は失われてしまった。春日山城とその周辺が無い訳で、もし現存していたらその威容がわかったであろう。しかし、失われた今、さまざまな情報から語れる夢が残されたともいえるのだ。

本絵図は、描かれた城と古城という記載、それに全く城という文字が無い城がある。描かれているのは直峰城で顕法寺城が古城と記され、猿毛城は猿毛山として木に覆われている。現在我々は植木宏氏、花ケ前盛明氏はじめ緒先学によって調査された多くの山城を知ることができるが、本絵図にはそのほとんどは記載されていないのである。これは、会津へ行く直前に太閤秀吉によって行われた検地の段階では、城持ちの家臣団も統合されて春日山城もしくは府中に集住させられていたことを示すものといえよう。

本絵図と現在の城跡の所在によって知ることのできるのは、まさに府中の城としての春日山城の姿であり、越後府中を城下町とする大城郭の完成は後の福島城、そして高田城へと続く越後太守の居城の原形であると言えよう。

春日山城から福島城へ（結びにかえて）

慶長三（一五九八）年、上杉景勝は太閤秀吉の命により会津へ国替えとなり、越前の北ノ庄城主堀久太郎秀治が春日山城主となった。堀家に関する史料を『上越市史』の藩政資料で見ると、「国布（府）」や「府中御城」などを確認することができる。このことは、春日山がそうであったように、堀氏の福島築城は府城としてなされたものであることが理解できるのである。

堀氏が築城地を関川の東として福島の地を選んだのはなぜだろうか。府中御城などと書き残すことは、明らかに中世越後府中、言い換えれば春日山城を中心とした上杉支配構造からの脱却を意図したものであったであろう。福島城は、中世から近世へ移行する過程で造られた越後太守のシンボルであったのだ。

次回では福島城から高田城へ至る道を述べていく。

まち人

ライオン像の建物をまちづくりに活かす会

「ライオン像の建物」とは、直江津の天王町にある擬洋風建築でかつ土蔵造りの旧銀行という独特な景観をもつ建物である。まちの人には「ライオンのうち」「ライオン像の建物」などと言われて親しまれ、ランドマーク的な存在でもあった。

大正七年頃、高橋達太が買い取り、現在地に移築。高橋回漕店の社屋に改装したものである。明治から昭和の直江津の物流経済の繁栄ぶりを示すものであり、平成二二年所有者から上越市に寄贈されている。

寄贈の話が続いていた五年前、同じ思いでいた「三人の男」が、ライオン像の建物を活用して、まちづくりの核として活用しようと語らって始まったのが「ライオン像の会」。



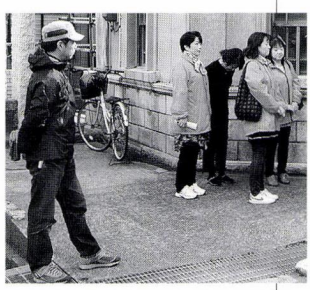
移築当時の高橋回漕店（旧直江津銀行）

まず「まちを知ろう」と始めたまち歩きから、情報満載の「旅情のまち直江津」マップができた。

現在は会員も増え、会主催のまち歩き、各種団体のまち歩きの案内、小学校の総合学習の支援に積極的に参加するなど、地域に密着した活動が評価されている。



まち歩き前にまちの概要を説明する代表の磯田さん





毎年五月から十一月まで、三八朝市が開かれる土・日・祝日に「ライオン像の家」を核にまち歩きを主催。

〈問合せ〉地域住環境建築研究所・磯田一裕さん

TEL・FAX　025-543-6226

歴史は「今日」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

謎の青年 千代垣素直

千代垣素直碑の発見

五智国分寺三重塔の向かい側に石垣が積まれ一段高くなった場所がある。五段ほど石段を上がった左手に芭蕉の句碑、右には三重塔建立の棟梁曽武川氏の墓所、さらに一段高くなった正面には佐田介石の墓石（碑）が建っている。しかし草藪になっていて訪れる人もまれであった。ここに江戸時代の直江津今町が産んだ、狂歌師千代垣素直の墓が誰にも知られず草むらに埋もれていたとは誰も知らなかった。

東日本大震災の年の一月、狂歌をとおして日本の文化思想史を研究している東北大学の高橋章則准教授は、ベルギー王立美術館で同館所蔵の歌川広重作「魚づくし」に、「千代垣素直」という狂歌師の名前を見出した。帰国後確認したところ、准教授が所持する天保七（一八三六）年に刊行された『千代垣素直追福秋露集』という「追悼集」の「素直」であることが分かった。

序文には「越後直江の津の千代垣素直といひしは賞月楼見空がひとり児にて…」とあり、「江戸に出て四年余り狂歌の師・篤垣真葛について古典などを学ぶも、父の病の看病のため帰郷。わずか二十歳で亡くなった」と書かれている。

巻末に「北越五智国分寺境内之図」として、

千代垣素直
人よりもまづ驚きて
日盛りのあさもよわる秋の初風

という狂歌が彫られた碑（墓所）が描かれていた。

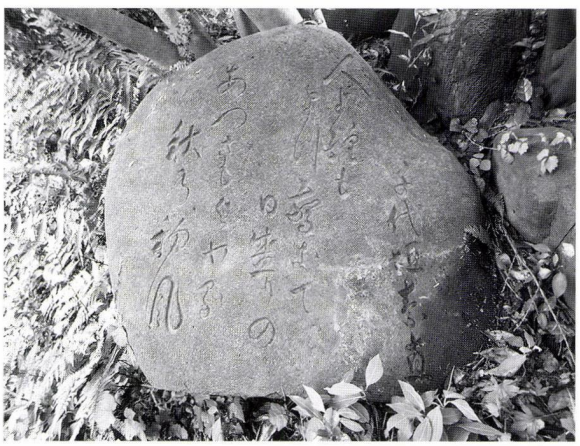
高橋准教授は存在を確かめるべく、上越市の関係機関に問い合わたのが三月十一日、未曾有の大地震「東日本大震災」が発生。五月になって再び「千代垣碑」の探索が始まり、当時、直江津のまちに歌碑・文学碑を建立していた三八朝市周辺まちづくり協議会の梅田氏（当時天王町町内会長）を経由して調査依頼がきた。

手がかりをつかめないまま、冒頭の一段高くなった場所へ上がって見ると、佐田介石の墓石の左脇に「人よりも…」と刻まれた石があり、裏側には「直江津竹田氏」と彫られている。一段下がった所には、ほとんど読めない碑（後に素直の追悼文と分る）もある。そして驚くことに、築山の北側に同じ歌が刻まれた碑が、椿の老木の根元に転がされており、思わぬ場所での発見と「直江津竹田氏」という謎の人物の出現に驚かされることになった。

今でも、碑文の細部まで読み取ることが出来るのは拓本である。越路拓の会永井元会長に採拓をお願いする一方、倒された碑と地面との隙間にカメラを入れて撮影したところ裏側にも文字が彫られており、かすかな断片をつなげていくと、篤垣真葛という江戸の狂歌師の門人で、俗名を竹田嘉市郎、号を如苞、天保六（一八三五）年閏の七月一日に二〇歳で亡くなり、父の竹田見空（狂歌号）がこの碑（墓）を建てたということが推測できた。



中央　佐田介石墓碑



転倒している素直の墓碑

謎の人物像

高橋准教授の調査に添いながら千代垣素直の人物像を探ってみると、本名は竹田嘉一郎。直江津今町の和算家小林百哺の文政十一（一八二八）年の「算学門人帳」（『上越市史』資料編・近世）に、「竹田慶次郎・改嘉一郎」という記述があり肩書には「新川」と記されている。おそらく同一人物に間違いないであろう。

直江津今町の新川端町の住人で、碑を建てた父親も賞月楼見空という狂歌号を持っていることから、竹田家は狂歌をたしなむ余裕を持つ大きな商家と想像される。しかし家が断絶したらしく、残念ながらそれ以上のことをたどることは現時点では不可能である。

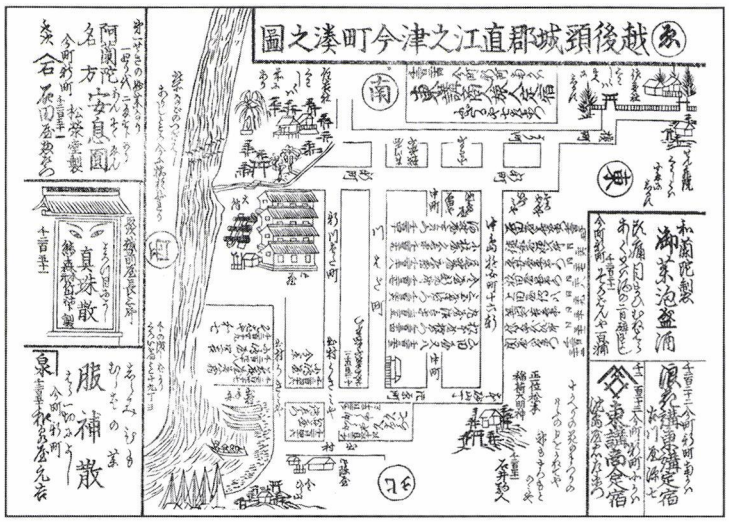
『千代垣素直追福秋露集』の追悼文によると、素直は天保二（一八三一）年、江戸の狂歌師篶垣真葛が直江津今町を訪れた折、その才能を認められて江戸へ上っている。真葛の秘蔵っ子として判者（選者）も遠くないと嘱望され、素直もそれを望んでいたが、父が病を得たため看病と家業を継ぐために帰郷することになった。しかし帰京後まもなく素直自身も病を得、天保六（一八三五）年、わずか二〇歳で急死した。

その才能を惜しむ人々が全国の同人に呼びかけて素直の「追福集」編み、五智国分寺境内に碑（墓）を建立したというのが、少ない資料から見えてくる素直像である。

素直当時の上越地方の狂歌と今町の繁栄と爛熟

狂歌とは後世、世相批判・社会風刺の歌と誤解されることになるが、形式にとらわれない自由な短歌形式の歌であり、江戸時代、都市を形成する商家の主人や近郷の庄屋などの教養として盛んになっている。

現三和区の富永春部の江戸へ上る旅日記、東都道中日記『吾妻紀行』は狂歌を中心にして書かれていることで



「東講商人鑑」の「越後頸城直江之津今町湊之図」

中島通りの左右に遊郭の名前がみえる
地図は南を上にして描かれている



姥捨山長楽寺の阿野屋高住狂歌碑

入る月をおしむ心のあらわれて
我が影法師ものびあがりけり

隣には高住の師匠四方真顔の狂歌碑もある

姥捨ての山の月影あわれさに
後ろにおいて帰るまで見つ

もわかる。

高橋准教授は、素直の師匠である篤垣真葛が門下の作品を集めた狂歌集『百人一首鐘声抄』の中から上越地域の狂歌人の名前を四〇人確認し、月例の狂歌集（同人誌）に投稿できるような狂歌人は一〇〇人を超えると推定している。

富本節の語り手、富本繁太夫の旅日記『筆満可勢』を見ると、繁太夫は文政十二年十一月二八日（一二月天保と改元）、高田下小町の坪屋太左衛門方へ投宿し、二里先の直江津今町にある「天下御免の遊女場」通いをさっそく始める。もちろん遊郭での興行もあるのだが遊びも盛んである。その遊びのひとつが狂歌である。暮れも押し詰まった二二日、中島遊郭の阿野屋に登楼して狂歌の会を催している。この阿野屋の楼主、阿廼屋高住は「真顔（四方真顔・真葛の師匠）連にて判者広めなし（判者となった披露）阿野屋大人と言いて専ら歌を詠む」と、繁太夫は書いている。

高住は驚くことに信州姥捨山の長楽寺に、自身の狂歌を刻んだ巨大な狂歌碑を建立している。また、この筵には「墨染庵と言いし和尚」が登場する。この人物は「魚づくし」に「越直江津　墨染庵柚阿弥」として名前を残し、光明寺という肩書も持っている。

高橋准教授が素直の名を見出し、墨染庵も名前を連ねる「魚づくし」とは、優秀な狂歌に歌川広重がさし絵を描いたものであり、素直の父身空も名をとどめている。

安政二（一八五五）年に刊行された『東講商人鑑』（西日本は「浪花講商人鑑」）は会員制の旅のガイドブックで、利用者のみならず登録される宿や土産物屋も会員登録が必要である。直江津今町には商家や旅籠とともに遊郭の繁栄が描かれ、阿野屋とともに狂歌人石井駒人の名

も見え、五智国分寺境内図には素直の碑が描かれている。

また、會津の紀興之（きのおきゆき）が元治一（一八六四）年に著した『越後土産』にも素直の碑が描かれている。

これら断片的な史料であるが、素直像をとおして、高田藩の経済の多くを支えた当時の直江津今町の繁栄と爛熟ぶりが見えてくるのである。

明治に至って、この碑（墓）が、なぜか別人の碑（墓）と入れ替わることになる。ランプ亡国論などを説いて全国を遊説し、明治十九年、高田で客死した佐田介石という奇僧の墓所に替えられてしまったのである。

墓碑銘の揮毫が明治の三筆といわれた高橋泥舟であることも手伝って、後の郷土史家によって広く紹介されることになり、素直の碑は忘れ去られることになった。

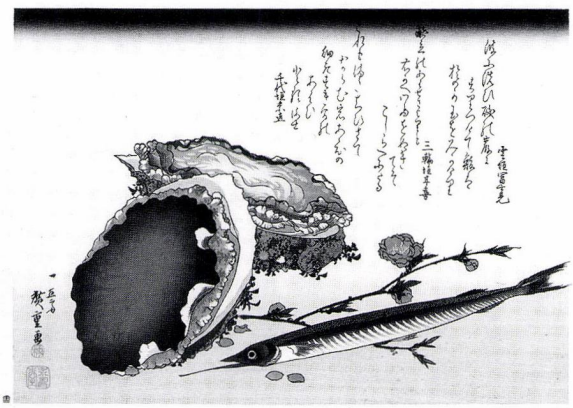
竹田家が断絶したとはいえ、墓石を転倒させてまで介石の墓を建てた熱狂的信奉者達とは何者であったのか。

平成二五年七月十三日、地域活性化団体「まちおこし直江津」が、上越市の地域活動支援事業の採択を受けて碑を復元している。

（佐藤）



「東講商人鑑」（部分）
五智国分寺境内図に登場する素直の 碑



歌川広重「魚づくし」
右から３首目
これもまたちひさて
ならむ岩あいの
細きすきまの
あわひ
とる海士
千代垣素直



佐田介石の碑と並んで復元された
千代垣素直の碑

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき　再刊にあたって

経済の針が上向きになってきた。

この一〇年の中でスピードに追われ「変えるべき姿」「変えてはいけない姿」の領域が曖昧になり、合わせてみたら「格好わるいね」になってしまった。誤認識と偽装を使い分けても、やっぱり「格好わるいね」。

二〇年十二月、三二号以降休刊していましたが、五年を経て三三号の発行になりました。この間当地でもいろんな姿が変わっていますが「発刊のことば」にある思いは、今日も明日も変わらない願いです。

お読みいただいて、チョットの間、歩をゆるめて思い巡らせていただければ幸いです。

（梅田）

目　次

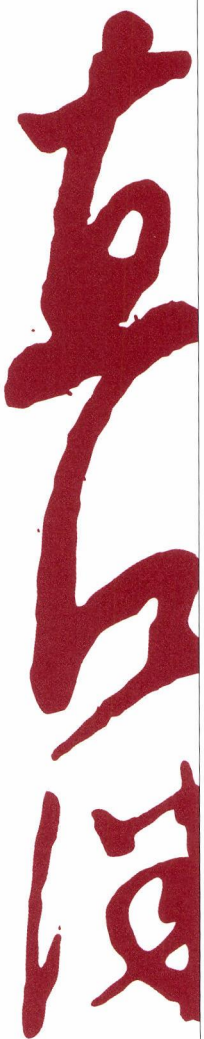
ロングインタビュー
Jホールディングス社長　伊藤利彦さん　4
特集「高田開府４００年」の意味　その1
新潟県文化財調査保護指導員　小島幸雄　15
巻頭エッセイ・このまちのこと　小松光代　2
歴史は「今日」への手紙
謎の青年　千代垣素直　27

「直江の津」
第九巻一号　通巻三三号
発行日／平成二五年十二月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2013・1号

直江の津

発行／平成二十五年十二月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円